愛すべき一人称と疑うべき二人称

Hisataka Kuzumi

一・人物（男）の朝

なぜ僕の母がこんな名前を僕につけたのか、皆目見当がつかない。橘鎚太郎（たちばなつちたろう）。昔話に出てきそうな、ひどく珍しいと同時に、何とも言い難い陳腐な名前だ。母は僕が成長していくにつれて、この名前にコンプレックスを抱かずに、ましてこの名前を気にいるとでも思ったのだろうか。中学２年生になったころ、僕は母に、どうしてこの名前を僕につけたの、と真剣に訊いたことがある。母曰く、鎚で叩いたときに周りが強く振動するように、周りに影響を与えるような人物になってほしいと思ったから、だそうだ。今でもその理由について釈然としない。そんな理由で鎚太郎なる名前をつけられるくらいだったら、橘爆弾とか、橘テロリストとか、あからさまな名前をつけられた方がよっぽど気が楽だ。しかし、今はこの名前を非常に気にいっている。退屈な自分をほんの少しだけ彩る、名前という名のヴェールである。とにかく、それが僕の名前だ。

月曜日の朝は、世界中の人間がそう感じるのと同様に、とてつもなく気が重い。それぞれに理由があると思う。僕の場合は、学校に行かなければならない、というのがその理由だ。僕が部屋を借りているアパートの最寄り駅から電車で十分くらいのところに、僕の通っている大学はある。全国でも名の知れた四年制の大学だが、大した教師もいなければ、興味深い授業もない。そこにあるのは、女の子のことしか頭にない男子学生と、自分の容姿を洗練することに精一杯の女子学生、それから、肩書をまとってつまらない話を偉そうに吐き散らす教師くらいだ。キャンパスは比較的新しいが、どこにでもありそうな典型的なコンクリート密集地にすぎない。僕は文学部の学生で、外国文学を中心に学んでいる。ただ本が好きなだけで、それ以外に特出してこの学部を選んだ理由はない。四年間を意味もなく過ごすのはなんとなく愚かな感じがするから、教職資格を習得するカリキュラムを取っている。人間関係は軽薄なもので、親友と呼べる人間は一人もいない。広く浅く友達づきあいをしているといったところだ。サークルには加入していないが、楽器屋でのバイトは入学当初から二年ほど続けている。週三回、アパートから歩いて十分弱のところにある小さな楽器屋で働いている。学校とバイト以外の時間は、もっぱら本を読んでいる。特別なことは何もしていない。僕の大学生活は、土にうずまったミミズの生活のように目立たないものだ。

いつものように朝食を作り、コーヒーを飲んでから歯を磨いた。皿を洗い、余裕を持ってシャワーを浴び、着替えを済ませ、紺色のリュックを担いでアパートを出た。ここから最寄り駅までは歩いて五分ほどの距離しかない。ミュージック・プレイヤーでビル・エヴァンズの古いアルバムを聴きながら、５月の感じのいい日差しを受けながら歩く。ふと僕は、いつものように彼女のことを想った。会ったこともないし、名前すら知らないが、なぜか僕は彼女のことをよく知っている。何より問題なのは、彼女が自分のことを愛しているということを、何の根拠もないけれども、自信を持って断言できるということだ。そして、僕も彼女のことを心から愛している。僕はこの非論理的な愛（愛とは論理で説明できるものではない、という哲学的指摘は置いておき）を四六時中感じ続けているのだ。今この瞬間ですら、僕は彼女と手をつないで歩いているような気がしてならないのだ。

僕は彼女の手をとりながら駅の改札をくぐった。空想的に、あるいは実質的に。

二・人物（女）の朝

電車の中は非常に混んでいた。いつものことではあるけれども、とても慣れることなどできないだろう。私はいつも一番前に車両に乗ることにしている。私の通っている大学の最寄り駅に着くと、この車両の入口が、改札へ向かう階段に一番近い位置で止まるからだ。今日は幸運にも座席に座ることができた。すかさず私は、まだ読み始めたばかりの本を開いた。フョードル・ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』。私はあまり外国文学には興味がないのだけれど（もっぱら私は近現代の日本文学を読む）、彼がこの本を読んでいるのを見たことがあって、衝動的に私も読まなくてはならないという思いに駆られたのだった。日本文学に慣れた私は、この小説（あるいは大抵の欧米作家が書く小説）に出るような不可解な欧米文化を理解するのにいくぶん時間を要するが、そんなことは気にかからない。彼に少しでも近づきたいと思う気持ちが、あらゆるネガティヴな思考を払いのけていった。彼も私と同じ学校に通っていることはわかっている。そう感じるのだ。さらに言えば、私の住んでいるアパートの最寄り駅は、彼の住まいの最寄り駅と同じであることも知っている。そう感じるのだ。そして、彼が今、この時間に出発する電車に乗るということも疑いのない事実である。そう感じるのだ。問題は、彼の名前も知らないし、会ったことも、話したこともないということ。しかし、私は彼を熱烈に愛しているし、彼も私のことを愛している。そう感じるのだ。私は、陳腐な映画や取るに足りない漫画で描かれるような、偶然の彼との出会いの瞬間を長い間待ちわびている。ばったり出くわして、「この時をずっと待っていたんだよ、堺麻友奈（さかいまゆな）さん」と彼に言われる、その瞬間を。

電車が目的の駅に着くと、私はリュックに本を入れて、我先にと出口に急いだ。改札にできる学生とサラリーマンの長い列で順番を待つのは我慢ならない。足早に改札を通り抜けた時、点字ブロックにつまずいて転んでしまい、左足の靴が脱げてしまった。私が脱げた靴をつかもうとすると、毛むくじゃらの手がぬっと現われて私の靴を拾い上げた。

「おいおい、大丈夫かよー」と毛むくじゃらは靴を私に差し出しながら言った。「月曜日の朝からずっこけるたぁ、なんとも幸先のいいこったねー」

この須々木という男は、熊のような体系をした顎鬚を生やした男で、性格の悪さは、かの若きエステラや、召使に殺されたロシア人主人にも勝るほどだ。私は、ありがとう、とだけ言って靴をひったくり、靴を履くためにそそくさと道の端へと移動した。須々木はにやにやしながら学校の方へと向かっていった。その後ろ姿は、ツキノワグマそっくりだった。いや、あれは本当にツキノワグマだったのかもしれない。ここに猟銃があれば、間違いなく背中に運命的かつ決定的な銃弾を撃ち込んだだろう。

三・人物（男）の昼

駅から学校へ歩いて行く途中、須々木を見かけた。彼と話したことはないが、ひときわ大きな男だからその存在は誰にでも知られていた。熊男は僕のずっと前方を歩いていたが、登校する学生の波から頭二つ分は飛び出していたと思う。

どこでぶつけたかはわからないが、左膝に痛みがあることにふと気がついた。ズボンの裾をまくって見てみると青い痣ができていた。きっと改札を出るときの人混みで誰かに蹴られたのだろう。よく覚えてはいないが、あれだけの人混みの中なら痣ができる程度で済んだだけ幸運なことだった。体中にある骨の三分の二を骨折しても不思議ではないほどの混みようだ。あの中を無傷でくぐり抜けていくことのできる人間は、きっとダブル・オーの称号を与えられたスパイくらいだろう。

学校に着くと、僕はまっすぐ四号館に向かった。二階の大講義室へと入り、適当な席を探して腰を下ろした。まだ授業まで少し時間があったので、読んでいた本を開いて読み始めた。この波乱万丈なロシア人三兄弟に起こる出来事と比べれば、あの人混みも大してひどいものではない。素晴らしきロシア人文豪の小説を、日本文学史の講義が行われる講義室で読んでいると、いささか変な気分になった。授業が始まったら、頭をロシアから日本へ切り替えなければならない。この授業を履修しているは、たまたま時間が空いていたからというのも一つの理由ではあるけれど、本当は彼女に会えるのではないかと期待してのことでもある。講義が行われている間中、頭の悪い犬のようにきょろきょろとあたりを見回しているということは容易に予測しうることだろう。

教授（名前は忘れた）が教室に姿を現して、生徒に静粛にするよう指示した。この老教授の話ほど退屈なものにはなかなか巡り会えないだろう。苦痛の九十分間。講義の内容は全く頭に入ってこなかった。教授が日本の伝統的な朝食について話し始めた時、僕が朝コーヒーを飲んだ後カップを洗い忘れたことに気がついたからだ。普段そんなミスをすることはあり得ないだけに、授業中ずっとそのカップのことが頭から離れなかった。テーブルに放置されたカップが、僕の頭の中でタップダンスを踊っていた。

幸か不幸か、コーヒーカップのおかげで苦痛の九十分間はあっという間に過ぎていった。午前の授業はこの講義だけで、昼休みまで一コマ分だけ空き時間になる。月曜日は午後にあと二つ授業がある。僕はいつもこの空き時間に学校の購買でパンを買い、それを持って近くの静かなカフェで本を読む。鼓膜を一瞬にして破るような、恐ろしく大きな声に包まれた学生食堂で貴重な時間を過ごすことは、どんなに札束を積まれて哀願されようとも避けたかった。カフェでの時間が、月曜日唯一の至福の時である。

パンを買おうと購買に行くと、突然頭痛がした。静かなところで座ろうと思い、トイレの個室に入って蓋をしたまま便座に腰かけた。リュックから頭痛薬を取り出して、水を飲まずにぐっと飲み込んだ。頭痛は珍しいことではない。僕にはよくあることだ。痛みが治まるまで前かがみになって眼を閉じていることにした。

四・人物（女）の昼

私にはこの学校に友達と呼べる存在はいない。学生食堂で昼食をとっている学生の中に一人ぼっちの者は誰一人としていない。みんなそれぞれの友達とテーブルに陣取り、爆竹が破裂するような声で笑いながら、ティラノサウルス・レックスよろしく叫ぶように話している。だから私は昼休みになると、学校の近くのカフェで昼食をとる。今日もその例に漏れない。いつものようにカフェに入り、ドーナツ二つと紅茶のセットを注文した。このカフェの唯一の問題点は匂いだ。私はコーヒーが苦手で、ここのコーヒー豆の匂いは刺激が強すぎる。しかし、学生食堂でみじめな思いをするよりは、コーヒーの匂いを我慢する方がずっといい。

　昼食を食べてしまうと。私は本の続きに取り掛かった。しばらく読んでいるうちに眠気が襲ってきた。それは思いがけない、突然の眠気だった。ほとんど暴力的と言ってもいいほどの眠気だった。私はなす術もなく、座ったまま眠りへと沈んでいってしまった。

五・人物（男）と人物（女）の夢

「ねえ、どうして今まで私を見つけてくれなかったの？私は名前も知らないあなたに近づこうと、いつも必死だったのよ」
「僕も君を探していた。ずっと長い間ね。僕も君の名前を知らなかったよ」
「私のこと、愛している？」
「うん、とても。心からそう言える。君は？僕のことを愛しているかい？」
「もちろんよ。ずっと前から愛している」
「よかった。これでお互いの気持ちをはっきりと伝えられたわけだ」
「……ねえ、あなたはいつもどこにいるの？」
「……ねえ、君はいつもどこにいるんだい？」
……。
「あなた、名前は？」
「橘鎚太郎。君は？」
「堺麻友奈。あなたの名前、初めて知った」
「僕も初めて知ったよ。不思議な感じだ。なんだか、前から君の名前を知っていたような気がしてきたよ」
「私もそんな気がする」
「ねえ、思うんだ。君はもしかしたら……」
「ねえ、私思うの。あなたはもしかしたら……」
……。
「ねえ、キスしないかい？」
「もちろんいいわ」
「でも君が今どこにいるのかわからないんだ」
「あなたこそ、一体どこにいるの？」
……。
「お預けかしらね、鎚太郎君」
「そうだね、麻友奈さん」
……。
「ねえ、やっぱり君って……」
「ねえ、やっぱりあなたって……」
「え？よく聞こえないよ」
「え？なんて言ったの？」
「なんでもない」
「なんでもないわ」
……。
「私、今あなたを感じる」
「僕、今君を感じるよ」
「……ねえ？」
「……ねえ？」
……。
「麻友奈さん」
「何？」
「なんでもないよ」
「……そう」
……。
「鎚太郎君」
「なんだい？」
「なんでもないわ」
「……そう」
……。
僕にはこの時間が何万年も続いたように思えた。そして、私にもこの時間が何万年も続いたように思えた。突然大きな音がして、僕と彼女は引き離された。突然大きな音がして、私と彼は引き離された。彼女は何かを叫んでいた。彼は何かを叫んでいた。いや、叫んでいたのは僕かもしれない。いや、叫んでいたのは私かもしれない。僕も彼女も、二人とも叫んでいたのだろう。私

も彼も、二人とも叫んでいたのだろう。
　愛しい時間は過ぎ去った。

六・人物（男）の夕方

午後の授業での集中力は絶望的なものだった。あんな夢を見た後に、現実的かつ実践的なものに対して集中力を注ぐことは、アルカトラズ刑務所から単身で脱獄するほど不可能な話だった。午後の授業の間中、僕は堺麻友奈のことを考えていた。彼女の姿は見たことがないから、僕は彼女の姿を想像（あるいは妄想と言った方が正しいかもしれない）するしかなかった。それでも、彼女の名前を知ることができたのはとてつもなく大きな進歩だった。学校中の人間に彼女の名前を尋ねて回れば、きっと最終的には会えるに違いない。僕はそんなことを考えつつも、同時に何も考えられなかった。何も考えられないまま時は順調に過ぎていった。気づいた時には、今日最後の授業の終わりを告げるチャイムが鳴り終わっていた。

キャンパスを出た僕は、駅に向かう道をフラフラと歩き始めた。学校から駅までの間で、何万人もの人間とぶつかったような気がした。僕に向けられた舌打ちの数は、普通の人間が一生のうちに向けられる舌打ちの数を軽く越えていただろう。

駅に着くと、改札を抜けてホームに立った。だしぬけに、いっそこのまま線路に飛び込んでしまおうかという気持ちになったが、まだ見ぬ彼女を見るまで死ぬわけにはいかないという強い気持ちが、そのくだらない思いつきを消し去った。今や、彼女と会うことが人生の目的となった気さえした。目的を果たした後の自分について考えてみようとしたが、もう僕の思考回路は全く使い物にならなかった。

電車が来ると、ゆっくりとそれに乗り込み、閉まったドアに寄りかかった。もう二年間もこの電車を使っているが、まともに窓からの景色など見たことはなかった。電車は様々なものの前を通り過ぎていった。大型ベビー用品店、さびれた玩具屋、看板がはずれかけた文房具屋、若者向けの洋服店、華やかな結婚式場、提灯の破れた居酒屋、巨大な総合病院、大きな花輪が立てかけられたセレモニーホール。景色を見ているうちに色々なことを考えた。何やら哲学的なことだった気がするけれど、よく覚えてはいない。人生とは儚いものだとか、現実とは辛いものだとか、おおよそ陳腐な哲学者や教師が掲げるような、ひどくくだらないことだったと思う。

電車が僕のアパートの最寄り駅に着いた時、まっすぐ家に帰る気にはならなかった。駅を出てから左に曲がろうが右に曲がろうが、アパートに着くまでの時間は同じだけれど、僕はいつも左へ曲がる。しかし、今日は反対方向へ曲がって、駅の近くにある小さな公園へ行くことにした。この公園からは、とてもきれいに夕日が見える。それに、彼女は駅を出ると、いつも右に曲がっていることを僕は知っていた。ひょっとしたら会えるかもしれないという思いもあった。

公園には滑り台と砂場、小さなジャングルジム、ブランコが二つだけあった。僕は右のブランコに座って、ゆっくりとこぎ出した。まだ頭痛は少し続いていたが、それに加えて吐き気がしてきた。ブランコの揺れのせいかもしれない。もうひとつのブランコに彼女が座っていてくれたらな、と思いながら左のブランコを見た。そんなことを思っているうちに、僕はついに吐いてしまった。ブランコの上で。幸いにして、服に嘔吐物はかからなかった。もう帰るべきかもしれない。

僕はまだ揺れているブランコから飛び降りた。

七・人物（女）の夕方

公園には誰もいなかった。私は学校の帰りにいつもこの公園の前を通るが、足を踏み入れるのは初めてだった。周りに大きな建物がないから、この公園のブランコは夕日を見るのに最高の場所のはずだ。私は左のブランコに乗って、ゆっくりとこぎ出した。夕日は、下の部分に少し雲がかかっていたが、美しく輝いていた。彼とこの夕日を眺めることができたら、どんなに幸せだろうかと考えた。右のブランコを見ると、少しだけ揺れていた。誰かがついさっきまで乗っていたのだろう。

　夕日をじっくりとみているうちに、なぜか虚しい気持ちになってきた。私はブランコをこぐのをやめ、それが勝手に止まるまで夕日を見続けた。夕日はほとんど沈みかけていた。ブランコが止まると、私は足早にアパートに帰った。ほとんど小走りだったかもしれない。とにかく早くアパートに帰りたかった。

八・人物（男）の夜、そして異変

アパートに着くと、僕はすぐに服を脱いで部屋着に着替えた。テーブルの上には、まだ洗われていないコーヒーカップが置いてある。それを洗う気にはならなかった。洗面台で顔を洗い、口をゆすいで、すぐさまベッドに飛び込んだ。この虚ろで不安定な気持ちを処理するには、眠ってしまうか、あるいは本を読むしかない。僕は全く眠気を感じなかったので、ベッドで本を読むことにした。きっとこの名作が心を落ち着かせてくれるはずだ、と自分の心に言い聞かせた。

しかし、僕はある事に気がついた。しおりの位置がおかしいのである。僕はこの本をもう少しで読み終わるはずだった。ページの番号だって覚えている。確か、六百二十一ページ。有名な「大審問官」の場面の手前だった。なのに、今、しおりの紐は二十三ページのところに挟まれている。

何かがおかしい。

僕は起き上がって部屋中をうろうろし始めた。歩き回りながら、どうやって気持ちを落ち着けようかを考えた。結局、シャワーを浴びて気持ちをスッキリさせることにした。それが僕の考えうる最善の方法だった。

シャワーをさっと浴びて寝間着に着替えたが、あまり効果はなかった。むしろ、悪い方向に進んでしまったのかもしれない。吐き気が再発したのだ。僕は吐き気を和らげるために冷蔵庫にあったミネラルウォーターのペットボトルを一気に飲み干したが、無駄な抵抗だった。トイレに駆け込んで、飲んだばかりのミネラルウォーターごとすべて吐き出してしまった。みんな吐き出してしまうと、いくらか楽になった。口をゆすいで、またベッドにもぐりこんだ。今度は恐ろしい眠気がやってきた。いい傾向だ。眠って、朝起きたらまた考えなおそう。

迫りくる眠気に抵抗することなく、眠りに飲まれていった。

九・人物（女）の夜、そして異変

電気は点いていたが、私の部屋はなんだか薄暗く感じた。リュックも服も放り投げられていて、部屋の中はひどい有様だった。夕食を食べる気にはならなかったから、私は眠くなるまで本を読むことにした。ベッドの横に置いてある本を取り、しおりの挟んである二十三ページから読み始めた。

だいたい五十ページほど読んだところで、のどが渇いてきた。水を飲もうとベッドから起き上がって冷蔵庫に向かって歩き出した。なんだか頭が痛い。今日は、あの夢を見てから体調がすぐれない。冷蔵庫を開くと、入れておいたミネラルウォーターのペットボトルは空になっていた。仕方ないから、コップ一杯だけ水道水を飲んだ。ベッドに戻る途中、ふとテーブルに眼をやった。コーヒーカップが洗われていない状態で置いてある事に気がついた。彼女はそれを掴み、しぶしぶ洗おうとした。カップには茶色い汚れが付いていて、コーヒーの匂いがした。

しかし、それはあり得ないことだった。私はコーヒーが苦手だ。これまでの人生で一度も家でコーヒーなど飲んだことがないのだ。

何かがおかしい。

彼女の手は恐怖で震え始め、カップを落としてしまった。大きな、宿命的な音を立て、カップは粉々に砕け散った。彼女は声もなく泣き出した。泣きながらベッドに座ってうずくまった。顔を膝に当てて泣いた。顔が膝に当たると、かすかに左膝が痛んだ。見ると、膝には青い痣がある。彼女はそれを気にも留めずに泣き続けた。

ひとしきり泣き続けると、今度は泣き疲れてしまった。もう涙は出し切っていた。今彼女にできることは、何も考えずにベッドにもぐって、すっかり寝てしまうことだった。彼女はベッドの上に横になった。枕は濡れていたが、シャンプーのいいにおいがする。いつシャワーを浴びたのか思い出せなかったが、今は一刻も早く眠りたかった。

彼女の望んだ通りに、睡魔は彼女を瞬く間に食らった。

十（ｉ）・人物（男）と人物（女）の夢、悪夢、あるいは事実解明

「また会ったね」
　「そうね。また会ったわね」
　「ただ正確には、会っているとは言えないかもしれない」
　「姿がわからないから？」
　「うん」
　「姿って、必要なもの？」
　「わからないよ。ただ、あった方が自然かなって」
　「そうね、確かに」
……。
　「ねえ、あなた今どこにいるの？」
　「ベッドの中だよ。君は？」
　「私もベッドの中よ。偶然ね」
　「本当に。君が僕の隣に寝ていたらいいのに」
　「それってすごく素敵ね」
　「素敵だ、本当に」

十（ⅱ）・人物（男）と人物（女）の夢、悪夢、あるいは事実解明

……。
「ねえ、君、もしかして『カラマーゾフの兄弟』を読んでいる？」
「ええ、読んでいるわ。あなたと同じ本よ」
「そうだね。僕はもう上巻を読み終わりそうだよ」
「私はまだ読み始めたばかり。なかなか難しい本だもの」
「確かにその通りだ」
「でも私、なぜかこの本の最後の部分、わかる気がするわ。どうしてかしら？」
「……」
「……」
……。
「ねえ、あなた、もしかしてミネラルウォーターを最近飲んだ？」
「うん、飲んだよ。ちょっと体調が悪くてね」
「今はどう？」
「大丈夫だよ。何回か吐いてしまったけれどね、飲んだミネラルウォーターごと」
「冷蔵庫に入れたミネラルウォーターがなくなっていたのよ、私飲みたかったのに」
「ミネラルウォーターが消えちゃったのかい？不思議だ」
「……」
「……」
……。
「ねえ、君、もしかして今日膝をぶつけた？」
「ええ、朝ね。転んじゃったのよ」
「大変だったね。僕も今日左膝に青あざができていたんだ」
「私も左膝に痣ができたわ。青くなっているの」
「冷やしておいた方がいいよ」
「あなたもね」
「……」
「……」
……。
「ねえ、あなた、もしかしてコーヒーが好き？」
「そうだね。毎日飲んでいるよ」
「私、コーヒーってあまり好きじゃないの」
「そうか、それは残念だな」
「今日カップ洗い忘れた？」
「そうなんだよ。一日中それが気なって仕方なかったんだ」
「……」
「……」

十（iii）・人物（男）と人物（女）の夢、悪夢、あるいは事実解明

……。
「どうして泣くんだい？」
「……ねえ、あなたって、もしかして……」
「そうだと思う」
「……」
……。
「気分が悪いの？」
「……ねえ、君って、もしかして……」
「そうだと思うわ」
「……」
……。
「君は、……僕を愛しているの？」
「あなたは、……私を愛しているの？」
「答えはイエスであり、ノーでもあるな」
「答えはイエスであり、ノーでもあるわ」
……。
「知っていたの？」
「知っていたのかい？」
「私は、知っていたのかもしれない」
「僕は、知っていたのかもしれない」
……。
「君に出会えてよかったよ。いつまでも愛している」
「あなたに会えてよかったわ。いつまでも愛している」
「初めて、本当に会えたんだね」
「初めて、本当に会えたのね」
……。
「君の名前は？」
「橘鎚太郎」
「僕の名前は？」
「堺麻友奈」
「あなたの名前は？」
「堺麻友奈」
「私の名前は？」
「橘鎚太郎」
「素敵な名前だ」
「素敵な名前ね」
「素敵だ」
「素敵ね」
「……」
「……」
「……」
「……」

十一・人物（男）の決断

僕は汗だくで目覚めた。なすべきことはわかっている。
　「さあ、行こうか、麻友奈さん」
　僕は食器置き場に向かい、果物ナイフを取り出した。

十二・人物（女）の決断

私は汗でぬれた右手で果物ナイフをしっかりと握った。なすべきことはわかっている。
　「さあ、行きましょう、鎚太郎君」
　私は左の手首に救世主なる果物ナイフを当てた。

十三・人物（男）の告白

「麻友奈さん、愛しているよ。これからも、ずっと」

十四・人物（女）の告白

「鎚太郎君、愛しているわ。これからも、ずっと」

十五・人物（男）の約束

「また違う世界で会いましょう、鎚太郎君。いえ、麻友奈」

十六・人物（女）の約束

「また違う世界で会おう、麻友奈さん。いや、鎚太郎」

十七・人物（男）の死

僕は左の手首を切り裂いた。

十八・人物（女）の死

私の左の手首から大量の血が流れていく。

十九・人物（男）と人物（女）の愛

死の直前、僕は彼女の手を握った。初めて彼女に触れた。
死の直前、私は彼の手を握った。初めて彼に触れた。
僕は、彼女の温もりを感じた。
私は、彼の温もりを感じた。
それから僕は闇になった。
それから私は闇になった。

我々は、とても幸せです。